

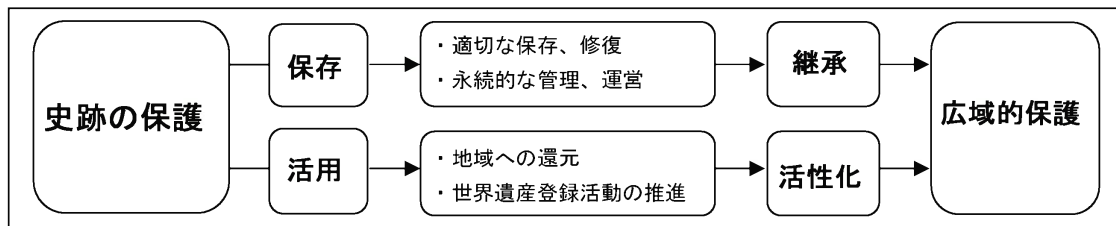
第Ⅱ章 基本計画

1 計画の目的と範囲

1) 計画の目的

この計画は、希少な装飾古墳として早急な保存措置が求められる国史跡桜京古墳の適切な保存を第一に、第1次宗像市総合計画で描く宗像市の都市像の実現のため、関連計画の趣旨に沿い、さらに世界遺産登録に向けた福津市との連携を念頭に入れ、史跡とその周辺の特性を十分に把握し、目指すべき保存・活用整備事業を具体化することにある。

また、計画策定にあたっては、下記に示す計画の前提を踏まえ、装飾古墳という特殊性に応じた各種調査を行い、市民意見の集約とその意見や評価を受け、永続的な管理・運営が可能な広域的史跡保護への道筋を示すことにある。



(図 Ⅱ-1-1 目的の概念図)

2) 計画の前提

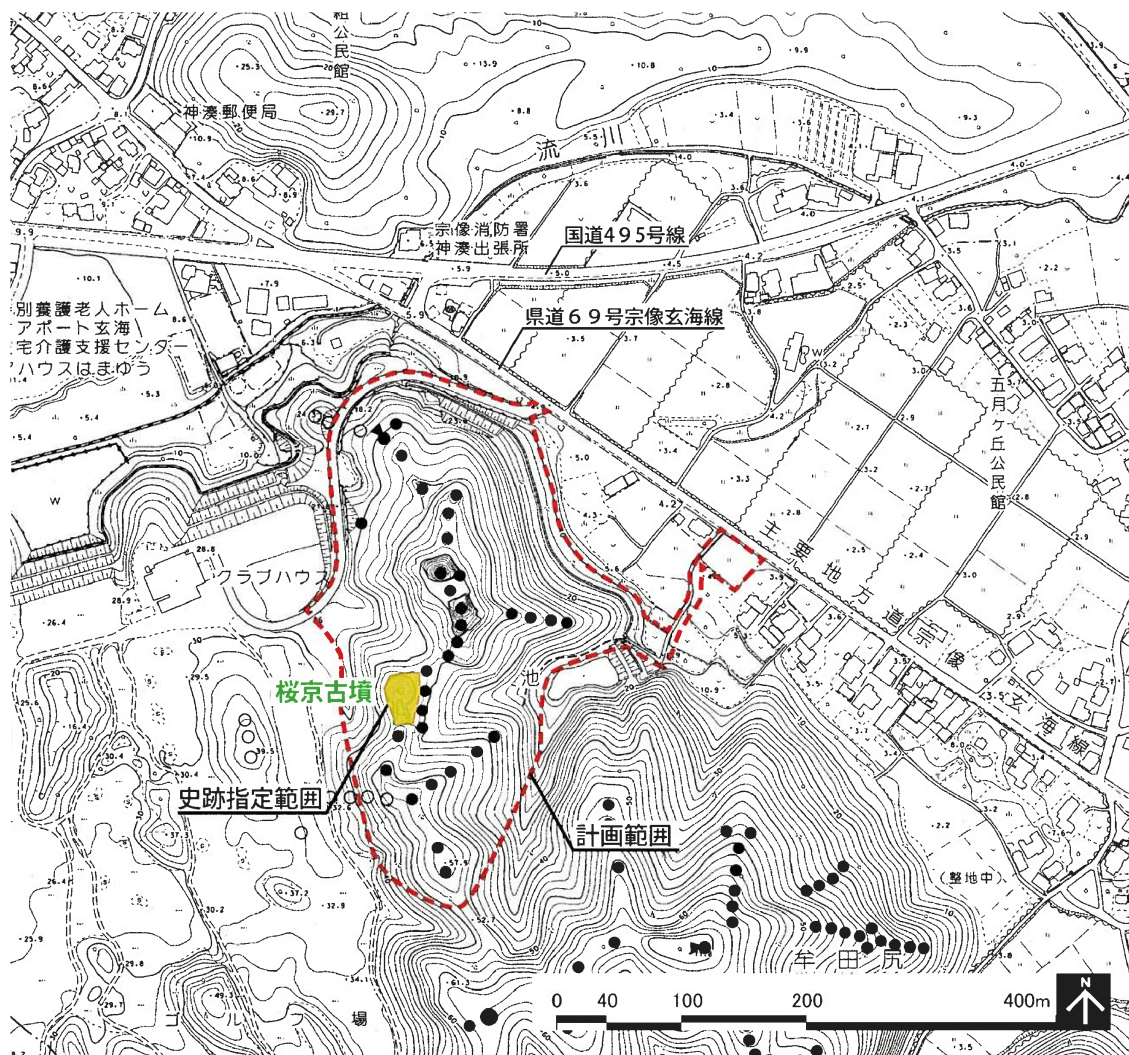
以下の4点に留意し、計画策定を進めるものとする。

- ・桜京古墳は、昭和51年(1976年)3月「玄界灘に面して存在する数少ない装飾古墳として貴重なものである」として国史跡に指定されている。古墳の本質的価値である壁画は確実に保存し、次世代へ継承をする必要がある。
- ・史跡の現状は、墳丘の西側が大きく崩落し、継続的な盛土の流出が懸念される。また周辺の植生は竹林が侵食し、墳丘上には樹木が繁茂するなど壁画と石室の存続を脅かしている。さらに石室の開口部は、土のうにより仮密閉されている状況であり、整備には緊急性がある。
- ・桜京古墳を含む牟田尻古墳群は、宗像氏の首長墓域である津屋崎古墳群と深く関る群集墳固有の景観を形成しており、広域的保護や世界遺産登録活動を念頭に入れた計画が求められる。
- ・宗像市は、世界遺産登録活動の推進や文化財の保全に努めることで、地域の歴史や文化への理解を深め、愛着心や誇りをもてる郷土づくりを進めている。市民に親しまれる史跡整備には、保存を前提に地域活性化やまちづくりなど、地域に還元される活用計画が求められる。

3) 計画の範囲

本基本計画の範囲は牟田尻桜京古墳群、牟田尻スイラ古墳群が存在する牟田尻の西部山塊の北端部、および北側のゴルフ場構内道路、東側の羅漢池堤下の敷地、県道 69 号線に至る里道、この里道に隣接し県道 69 号線に面する田畑の合計約 68,000 m²とする。計画範囲を以下の図に示す。

この範囲は順次、状況に応じ公有地化し、古墳群の保護および森林の再生整備を行う。史跡保護上急務として行う第 I 期整備の範囲、及びその整備の為の公有地化範囲に関しては、整備基本計画の後、現実性、公共性、財政的判断を行い設定する。



(図 II-1-2 計画範囲)

2 史跡周辺地域の環境の概要

1) 自然環境の概要

ア) 地形・水系・地質

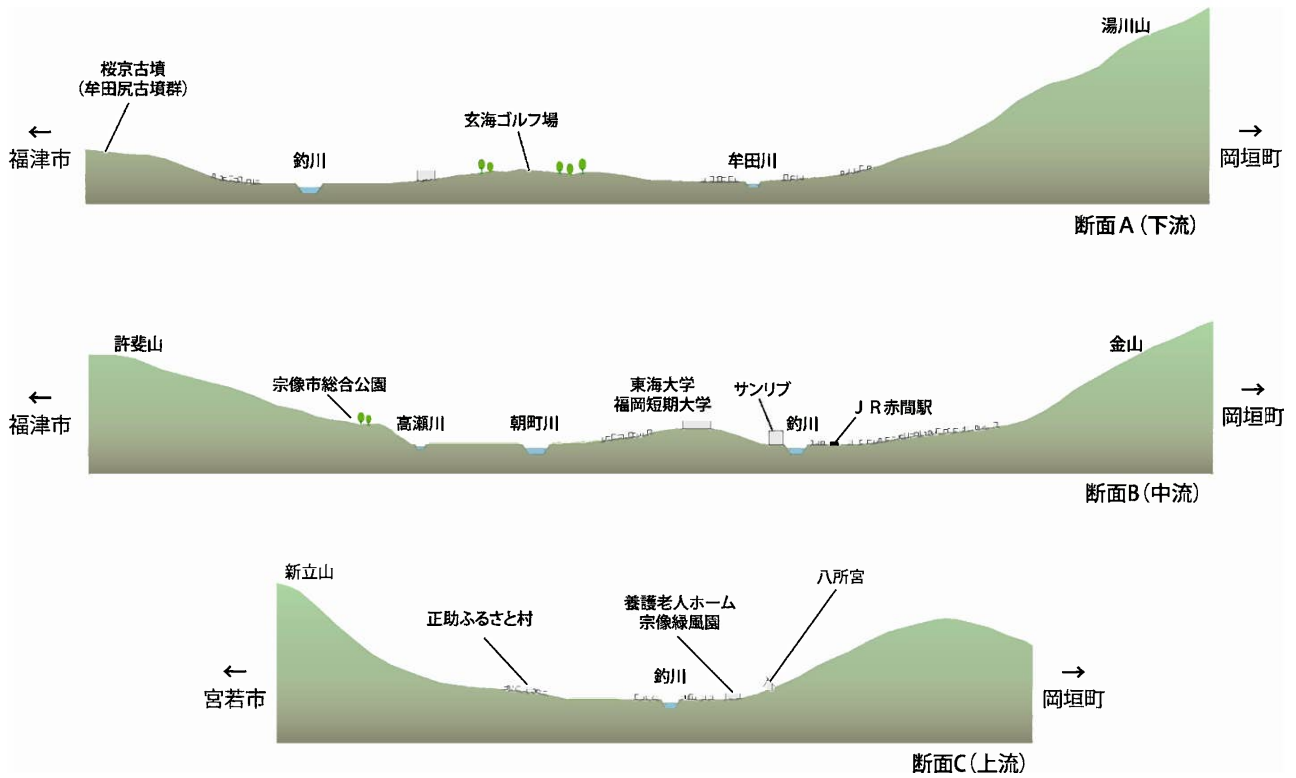
■宗像市の地形

宗像市の地形は北を海とし、他を丘陵性山地で馬蹄状に囲まれた盆地状の地域で、その内側には釣川が貫流する沖積平野と、山地から続く段丘状台地によって構成される。海岸線は緩やかな弧を描く砂丘、さつき松原と、急崖で囲まれた黒崎鼻、鐘の岬、草崎半島で構成される。また玄界灘には地島、大島、勝島、沖ノ島の4島が点在する。

三方を取り囲む山地は、遠賀・鞍手郡界をなす東部山地、宮若市境の南部山地、福津市界の西部山地の3つに区分される。四塚連峰として親しまれる東部山地は他の山地よりも高く、自然植生が残る。南部山地には釣川の水源も所在する新立山(325.7m)、をはじめ、標高250m級の山々からなり、西部山地はこれよりも低い。



(図 II-2-1 宗像市の地形)



(図 II-2-2 宗像市の地形断面)

■水系

市域中央を貫流する釣川は、多くの支流を集め肥沃な沖積低地を形成している。全長は約16kmで、支流には樽見川、山田川、朝町川、高瀬川、八並川などがある。水源は新立山(標高325.7m)付近にあり、それぞれの支流についてもほとんどが市内に水源を持つ。

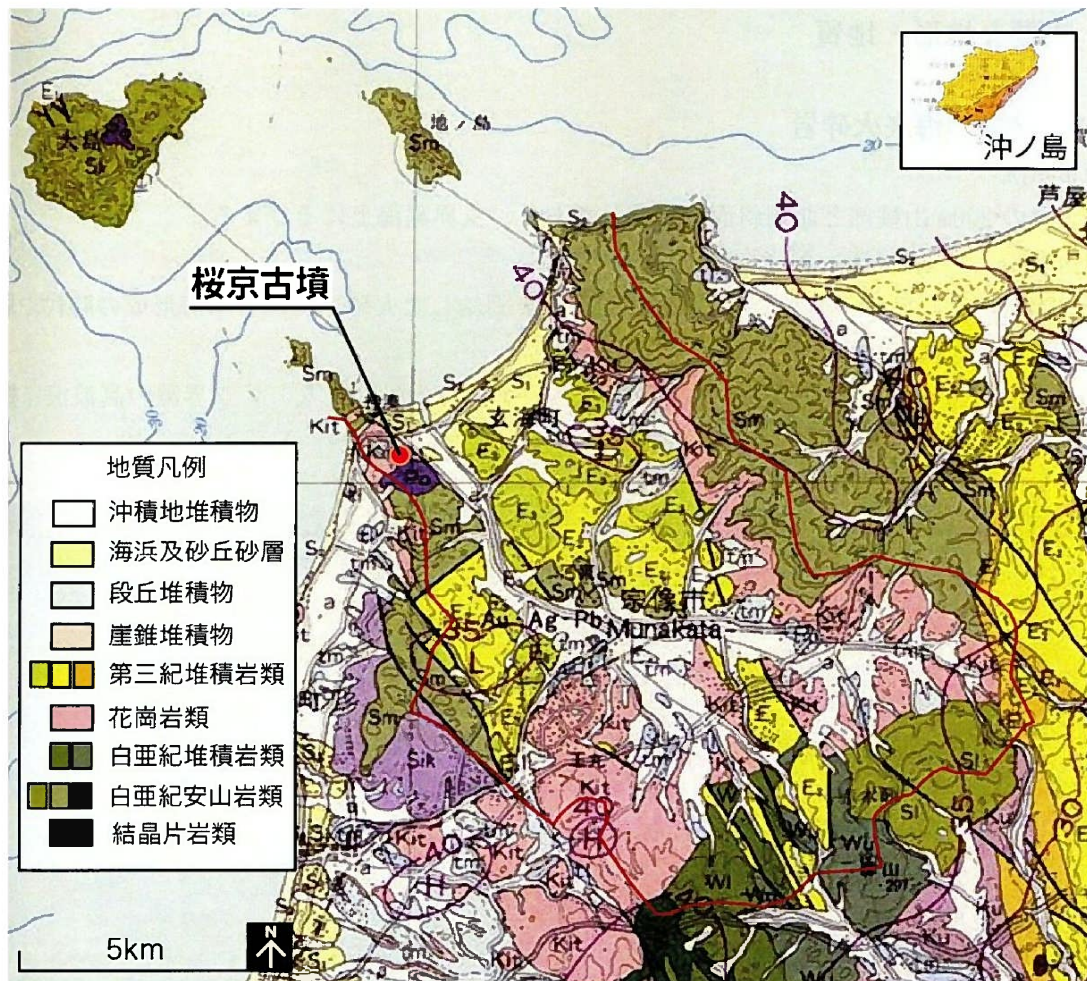
■地質

地質の構成は地形によって異なる。宗像市の地形は島嶼、海浜、低地（沖積地）、台地（段丘）、丘陵地、山地の6地形に分類することができ、地質についてはそれぞれ以下のようにまとめることができる。

島嶼	新生代第三紀層火砕岩と砂岩頁岩互層からなる浸食残丘
海浜	完新世の新砂丘砂層からなり、さらに内陸の新砂丘の下には更新世の古砂丘砂層が存在
低地（沖積地）	玄海地区、東郷地区、赤間地区に分布し、細長い河谷と谷底平野を形成
台地（段丘）	古い河岸段丘と扇状地からなり、段丘構成層は砂礫
丘陵地	古第三期堆積岩類と花崗岩類からなる
山地	古第三紀堆積岩類、白亜紀花崗岩類、安山岩類、堆積岩類から構成されている

（表 II-1 地形分類と地質）

桜京古墳の位置する牟田尻の西部山塊は、花崗岩類及び白亜紀安山岩類からなる。立地状況から、地形造成を伴うルートの整備が想定されるが、岩類により構成される山塊であることを念頭に入れておく必要がある。



（図 II-2-3 宗像市の地質図）出典；宗像市自然環境調査の報告書

イ) 植生と生物

■丘陵・山地の植生

宗像市の丘陵や山地部における現在の植生の大半はスギやヒノキの植林で、これに照葉樹林、竹林、若齢の落葉樹林などが混在している。

■自然林

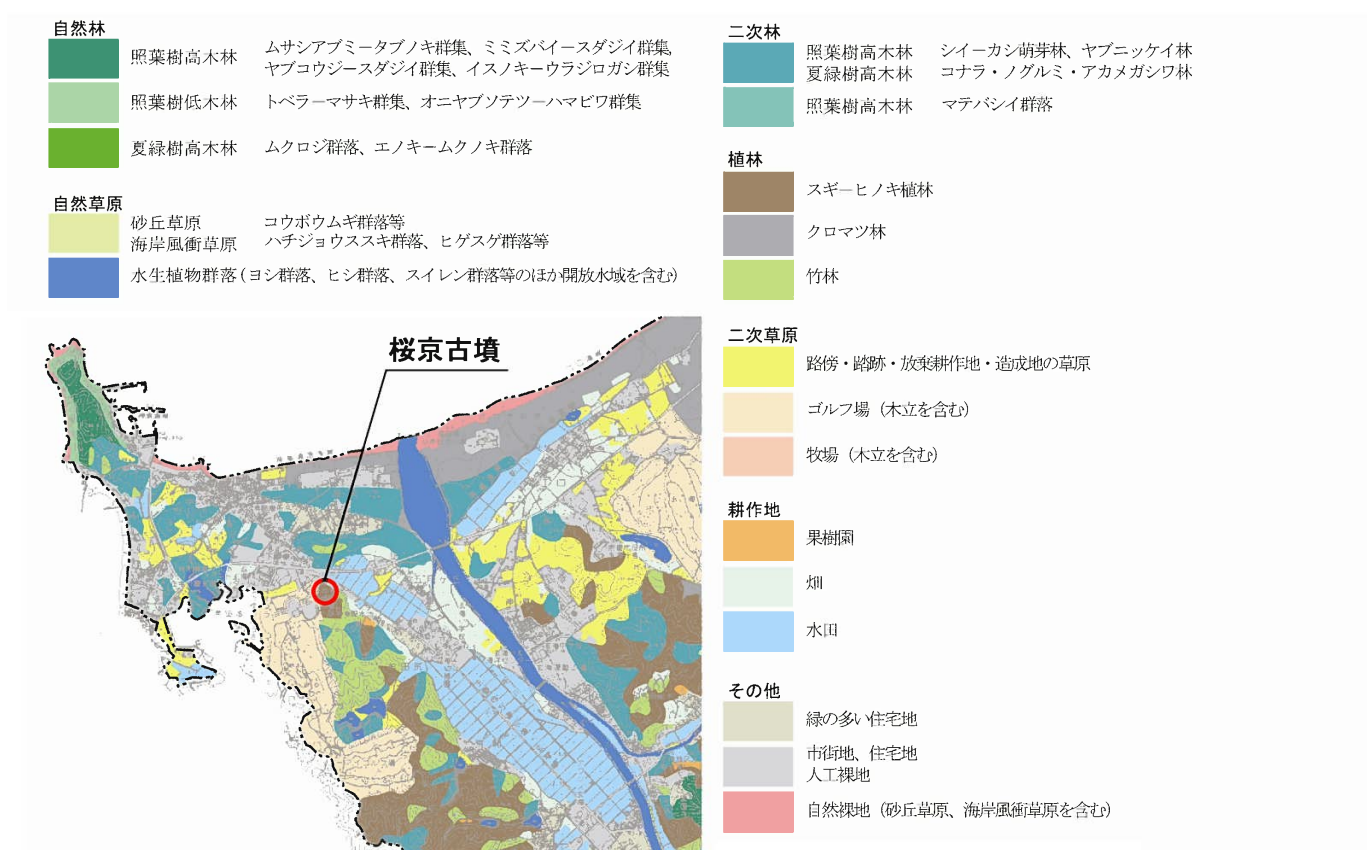
自然林は、ヤブツバキなどの常緑広葉樹、いわゆる照葉樹であり、東部山地の城山にまとまった広さを残すほかは、社叢林（神社の森）として断片的に残存している程度である。

■貴重な自然

貴重な自然については、玄海国定公園として指定される、さつき松原のクロマツ林、地島、勝島など 683ha、国指定天然記念物にはカンムリウミスズメ、沖の島原始林など、国指定 2 件、県指定 8 件、市指定 4 件があり、環境省の自然環境保全基礎調査では特定植物群落 12 件と自然景観資源 11 件が指定されている。

■自然観光の地域分類

宗像市自然環境調査報告書では、貴重な自然環境を 4 段階に区分しているが、この地区は 3 段階目の、ゾーン C（自然環境価値の比較的高い地域）に分類されている。



(図 II-2-4 宗像市の植生)

出典：宗像市自然環境調査の報告書

ウ) 周辺森林の状況

史跡地周辺の森林について、植生概況の把握の為の調査を行った。周辺の植生は自然生二次林と人工林による構成で、以下の計4種に分類される。

常緑広葉樹二次林	スダジイ(散生), ツブラジイ(散生), タブノキ(散生), ヤブニツケイ(散生), シロダモ(点生), カクレミノ(点生), モチノキ(点生), クロキ(点生), ホルトノキ(点生), マテバシイ(点生), クロガネモチ(点生), ヤブツバキ(点生) 等
常緑・落葉広葉樹二次林	シロダモ(点生), クロキ(点生), ヒサカキ(点生), ヤブツバキ(点生), カクレミノ(点生), モチノキ(点生), ヤマザクラ(点生), カラスザンショウ(点生), ゴンズイ(点生), イヌビワ(点生), クリ(点生), アカメガシワ(点生), ヤブムラサキ(点生) 等
竹林人工林及び逸出林	メダケ(散~群生), モウソウチク(群生), メダケ(群生), ダンチク(群生)
常緑針葉樹人工林	スギ(散~群生)・ヒノキ(散~群生)

(表 II-2 周辺森林の分類)

墳丘上及び墳丘西側は常緑広葉樹林となっており、墳丘東側一帯は孟宗竹人工林に浸潤され、その勢いは墳丘縁部にまで迫っており、孟宗竹林の下層植生は消滅している。

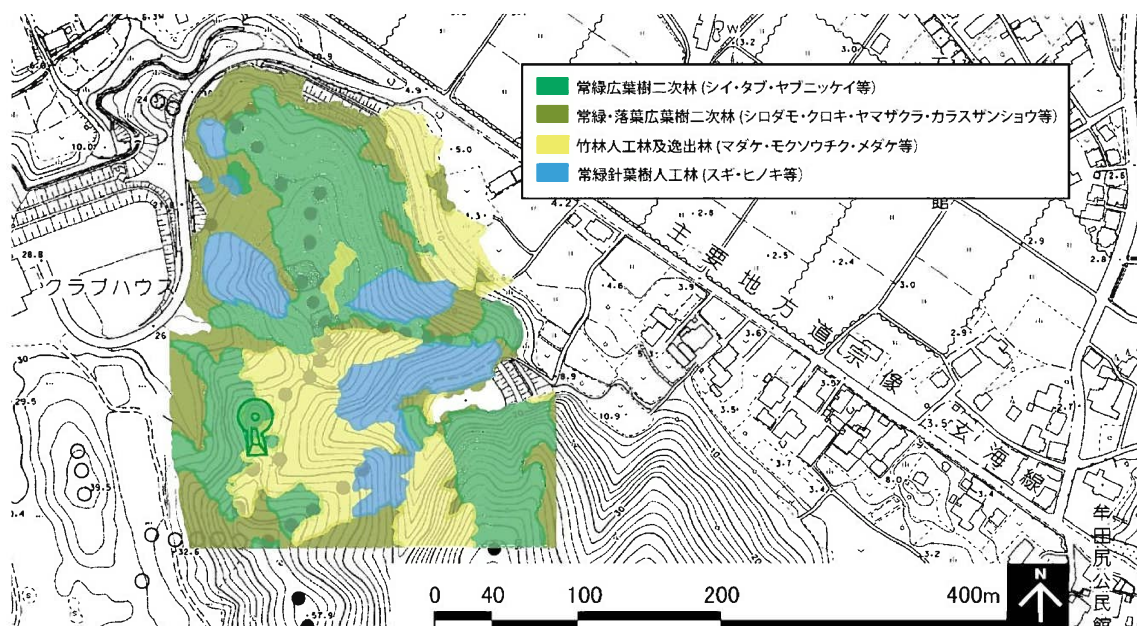
シロダモ、クロキ、ヤマザクラ等の常緑、落葉広葉樹が混生する二次林は林縁に発達している。墳丘の周辺にも多少見られるが、下層に生育する常緑樹の生育により15年程度で常緑広葉樹林に移行するものと思われる。

スギ、ヒノキの常緑針葉樹人工林の殆どは放置されており、広葉樹や竹に被圧されている。羅漢池からの登山ルート周辺には、この常緑針葉樹人工林、勢力を増し続ける孟宗竹林が広がり、その森林はかなり荒廃している。

周辺の森林は、周辺の古墳群とともに重要な整備要素とも捉えられる。荒廃した人工林や二次林は、再生整備の必要性がある。



(写真 II-2 墳丘に迫る竹林の様子)



(図 II-2-5 桜京古墳周辺の植生)